

農業による斃死が相次ぐとあっては、私の子供の頃の殺りくと較ぶべくもない状態になっている。

結婚後、小鳥の飼育と育雛に興味を持ち、繁殖期には毎週リゴ箱を購入して「庭籠（にわこ）」を作り、一年後には、玄関と茶の間の六帖と客間の八帖にまで進出し、毎日最低一時間位は管理に費いやされ、梅雨時ともなると、糞の臭気が家中に充滿し、また餌を求めてハツカネズミやゴキブリが多くなり、さすが協力的な家内も遂にたまたま、飼育の雑少の苦言を免するまでに至った経験もあるが、これとても当時は、未だ鳥本来の自然の姿を知らない趣味であった。

現在の私は、鳥を飼うことはしませんが、若し飼うことになったら日本国内に住める野鳥は自然に戻して、外国種の人間の保護なしには生きて行けない鳥（旅鳥つまり渡り鳥を除いて）ならと考えます。小鳥屋で売っている鳥は洋鳥で熱帯産（色彩がきれい）が多く、外に放しても、モズやタカ、ハヤブサの餌になってしまっていますので飼うことが保護になります。しかし、野鳥は特別の許可を得ない限り飼えないことに法律や条例で定められて

いますから、そういう人を見たときは注意してあげましょう。

さて、話は戻って、十年前、猪苗代より磐梯山、五色沼より土湯へ出て、鬼面山、箕輪山、鉄山、安達太郎山と往復縦走後、白布高湯に一泊し人形石を越えて西大願山に登山の折、生憎の低気圧（九月末日頃）で二千米余の登山道は、ガスと強風で目標をさえぎられ、道標は風雪に朽ちた上に、ぬれていて文字の判別がつかず、地図とコンパスを頼りに歩いている時、日の高い中（時刻より判断して）はまだ風やガスを恐ろしいとは思わず、かえって自分の社挙に喝采を博しているかの様に感じていたが、午後も二時を過ぎる頃ともなると疲労を増し、予定のコースタイムよりも遅れ、下山への不安のかけりが脳裏をかすめたとき、曾つてこのコースで男女混合のパーティーがガスに巻かれて遭難死したことを思い出し最初は激動の声のように聞こえていた心良い風の音が、今は、恨みをこめた亡霊のさげびに似て聞こえてきて、雨と汗に濡れた皮膚に鳥肌が生ずる思いで歩を運んでいくとき、突如、目前で切れたガスの間を黒いハト位の鳥